

# 「産出のための文法」の勘所

－「は」と「が」の使い分けを例に

一橋大学国際教育センター教授 庵 功雄

[isaoiori@courante.plala.or.jp](mailto:isaoiori@courante.plala.or.jp)

<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/>

# 1. 「は」と「が」に関する「誤解」

- ▶ 「は」と「が」に関する教師と学習者の共通見解
- ▶ (1) a. 「は」と「が」は難しい
- ▶ b. 「は」と「が」は韓国語話者以外は使いこなせない
- ▶ →本発表の目的
- ▶ →1. これらが「**誤解**」であることを示す
- ▶ 2. 日本語教育文法における記述の「**勘所**」を示す

## 2. 前提となること

- ▶ 日本語教育文法
- ▶ 主題と主語

## 2. 前提となること

- ▶ 日本語教育文法
- ▶ 主題と主語

## 2. 前提となること (1)

# 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法とは (庵2011a)
- ▶ 日本語学の誕生 (1970年代後半?)
- ▶ →日本語学と日本語教育の蜜月期
- ▶ →日本語学の「成熟」 (1990年代以降)
- ▶ →日本語学の研究が進めば、それが結果として日本語教育の役に立つ
- ▶ →これは「**誤解**」
- ▶ →日本語学と日本語教育の*かい離*
- ▶ →日本語教育に直接役に立つ記述を目指す
- ▶ →**日本語教育文法**の誕生

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法に必要なもの (庵2017)
- ▶ ・産出のための文法
- ▶ ・母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ ・類義表現の使い分けと無標、有標
- ▶ ・母語の知識を活かした日本語教育

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法に必要なもの
- ▶ ・産出のための文法
- ▶ ・母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ ・類義表現の使い分けと無標、有標
- ▶ ・母語の知識を活かした日本語教育

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 産出のための文法
- ▶ 理解レベル：意味がわかればいいもの
- ▶ 産出レベル：意味がわかった上で、使える必要があるもの
- ▶ (例) 事由と理由
- ▶ 事由：法律や行政の分野に偏る。通常は理解レベル
- ▶ 理由：明らかに産出レベル
- ▶ →日本語教育文法では、まずは産出のための文法を優先すべき



## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法に必要なもの
  - ▶ ・産出のための文法
  - ▶ ・母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
  - ▶ ・類義表現の使い分けと無標、有標
  - ▶ ・母語の知識を活かした日本語教育

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ 母語話者にとっての文法
- ▶ 文法能力 (grammatical competence)
- ▶ (2) a. 母語話者は、母語の任意の文の文法性判断ができる
- ▶ b. 母語話者は、モニターが可能な環境では、文法的な文のみを産出する
- ▶ **母語話者にとっての文法は、母語話者の文法能力に依存できる**
- ▶ ○○とは言いますね。××とは言いませんね。
- ▶ それはなぜかと言うと、△△だからです。←**謎解き** (白川2002)

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ **非母語話者にとっての文法**
- ▶ **非母語話者にとっての文法は、母語話者の文法能力に依存できない**
- ▶ ←文法能力を持っているのなら、文法の説明は不要
- ▶ ??○○とは言いますね。
- ▶ ??××とは言いませんね。
- ▶ ????それはなぜかと言うと、△△だからです。
- ▶ →**母語話者向けの記述（日本語学）と非母語話者向けの記述（日本語教育文法）は全く別のものと考えべき**

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ →母語話者向けの記述（日本語学）と非母語話者向けの記述（日本語教育文法）は全く別のものと考えべき
- ▶ **母語話者にとっての文法における規則**
- ▶ →網羅性、体系性を重視
- ▶ → (3) a. 規則の数を増やす
- ▶           b. 規則を抽象化する
- ▶ → (規則のカバー率) 100%を目指す文法

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
- ▶ 母語話者にとっての文法における規則
  - ▶ → 網羅性、体系性を重視
  - ▶ → (3) a. 規則の数を増やす
  - ▶           b. 規則を抽象化する
  - ▶ → (規則のカバー率) 100%を目指す文法
- ▶ 非母語話者にとっての文法における規則
  - ▶ → (3a) (3b) とも産出には不適
  - ▶ → 「(規則のカバー率) 100%を目指さない文法」が必要

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法に必要なもの
  - ▶ ・産出のための文法
  - ▶ ・母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
  - ▶ ・類義表現の使い分けと無標、有標
  - ▶ ・母語の知識を活かした日本語教育

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 類義表現の使い分けと無標、有標
- ▶ その文脈では形式Aか形式Bのいずれかを使わなければならない (相補分布)、形式Aが使われる場合の方が制限が多いとき、形式Aは形式Bより有標 (marked)、形式Bは形式Aより無標 (unmarked) と言う
- ▶ (4) その文脈では形式AとBのいずれかを必ず使わなければならない (AとBが相補分布をなし)、文脈Xでは形式Aのみが使え、文脈Y (= not X) では形式Bが使えるとき、形式Aおよび文脈Xは有標、形式Bおよび文脈Yは無標である

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 類義表現の使い分けと無標、有標
- ▶ (4) その文脈では形式AとBのいずれかを必ず使わなければならない (AとBが相補分布をなし)、文脈Xでは形式Aのみが使え、文脈Y (=not X) では形式Bが使えるとき、形式Aおよび文脈Xは有標、形式Bおよび文脈Yは無標である

	形式A	形式B	
▶ 文脈X	○	×	有標
▶ 文脈Y (=not X)	×	○	無標



## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 類義表現の使い分けと無標、有標

	形式A	形式B	
▶ 文脈X	○	×	有標
▶ 文脈Y (=not X)	×	○	無標

- ▶ 文脈指示のソとア
- ▶ A : 昨日山田に会ったんだけど、{あいつ/#そいつ} 相変わらず元気だったよ。
- ▶ B : {あいつ/#そいつ}、ほんと元気だよな。
- ▶ A : 友人に山田という男がいるんですが、{#あいつ/そいつ} 面白い奴なんですよ。
- ▶ B : {#あの人/その人}、どんな仕事をしてるんですか。
- ▶ 文脈X : 話し手も聞き手も先行詞の指示対象を知っている
- ▶ 文脈Y : それ以外

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 類義表現の使い分けと無標、有標

	形式A	形式B	
▶ 文脈X	○	×	有標
▶ 文脈Y (=not X)	×	○	無標

- ▶ 文脈指示のソとア
- ▶ 文脈X : **話し手も聞き手も先行詞の指示対象を知っている**
- ▶ 文脈Y : それ以外
- ▶ 使い分けの規則 :
- ▶ 文脈X (**話し手も聞き手も先行詞の指示対象を知っている**) ではア、それ以外はソ
- ▶ →**実質的に、規則は1つ**

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 類義表現の使い分けと無標、有標

	形式A	形式B	
▶ 文脈X	○	×	有標
▶ 文脈Y (=not X)	×	○	} 無標 ← 「は」を使っても間違いにならない
▶	○	○	

- ▶ 文脈X : 形式Aのみが使える
- ▶ 文脈Y (=not X) : 形式Bが使える (=形式Bを使っても間違いにはならない)
- ▶ →庵 (2011b) と庵 (2015a, 2016a) および本発表の違い

## 2. 前提となること (1) 日本語教育文法

- ▶ 日本語教育文法に必要なもの
  - ▶ ・産出のための文法
  - ▶ ・母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法
  - ▶ ・類義表現の使い分けと無標、有標
  - ▶ ・**母語の知識を活かした日本語教育**

## 2. 前提となること (1)

### 日本語教育文法

- ▶ 母語の知識を活かした日本語教育
- ▶ **母語転移 (transfer)**
  - 正の転移 (positive transfer)
  - 負の転移 (negative transfer)
- ▶ 文法項目において、**正の転移の方が (圧倒的に) 多い** (cf. 庵2015b, 2016b)
- ▶ → **正の転移を活かし、負の転移を抑えられれば、習得の効率は (飛躍的に) 高まる**
- ▶ → **母語の知識を活かした日本語教育**
- ▶ → **三位一体の習得研究** (張2011、庵ほか編2017)

# 3. 前提となること (2)

## 主題と主語

- ▶ 主題と主語 (三上1960、庵2003, 2012、野田1996)
- ▶ **主題 (論理学的主語 subject in logical sense)** :
  - ▶ 通常文頭にあつて、その文で述べる対象を示す。「**は**」でマークされることが多い
- ▶ **主語 (文法的主語 grammatical subject)** :
  - ▶ 行為、出来事、状態、存在の主、感情の感じ手 (三上1963、lori 2017)。「**が**」でマークされる
- ▶ **主題と主語が一致する場合**
  - ▶ **太郎は**この本を書いた。
  - ▶ **太郎が**この本を書いた (こと) ←無題化 (三上1960)
- ▶ **主題と主語が一致しない場合**
  - ▶ この本は太郎が書いた。
  - ▶ この本を太郎が書いた (こと)

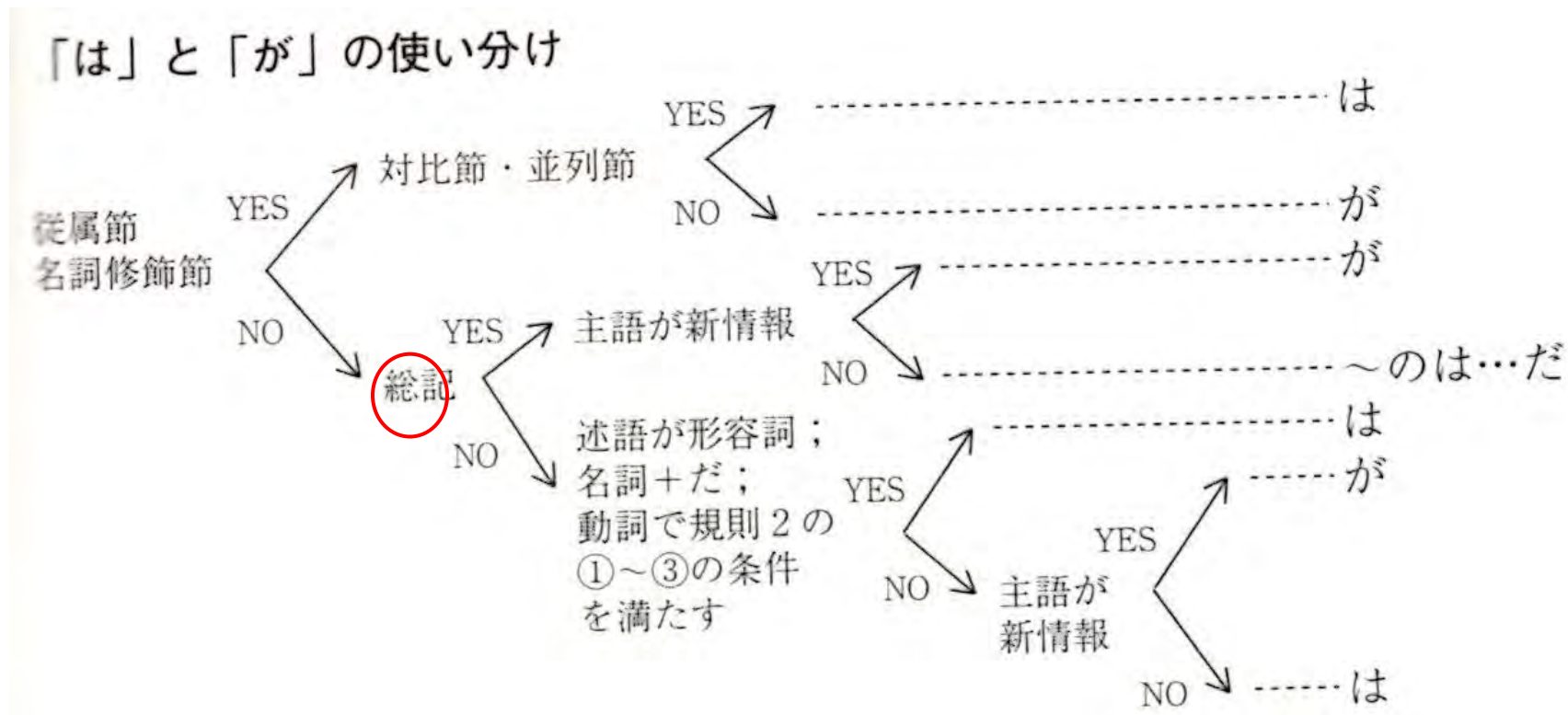
## 4. 先行研究

- ▶ 野田（1985）：現在に至るまで「は」と「が」の使い分けに特化して論じた唯一の本だが、「セルフマスター」するのは難しい



# 4. 先行研究

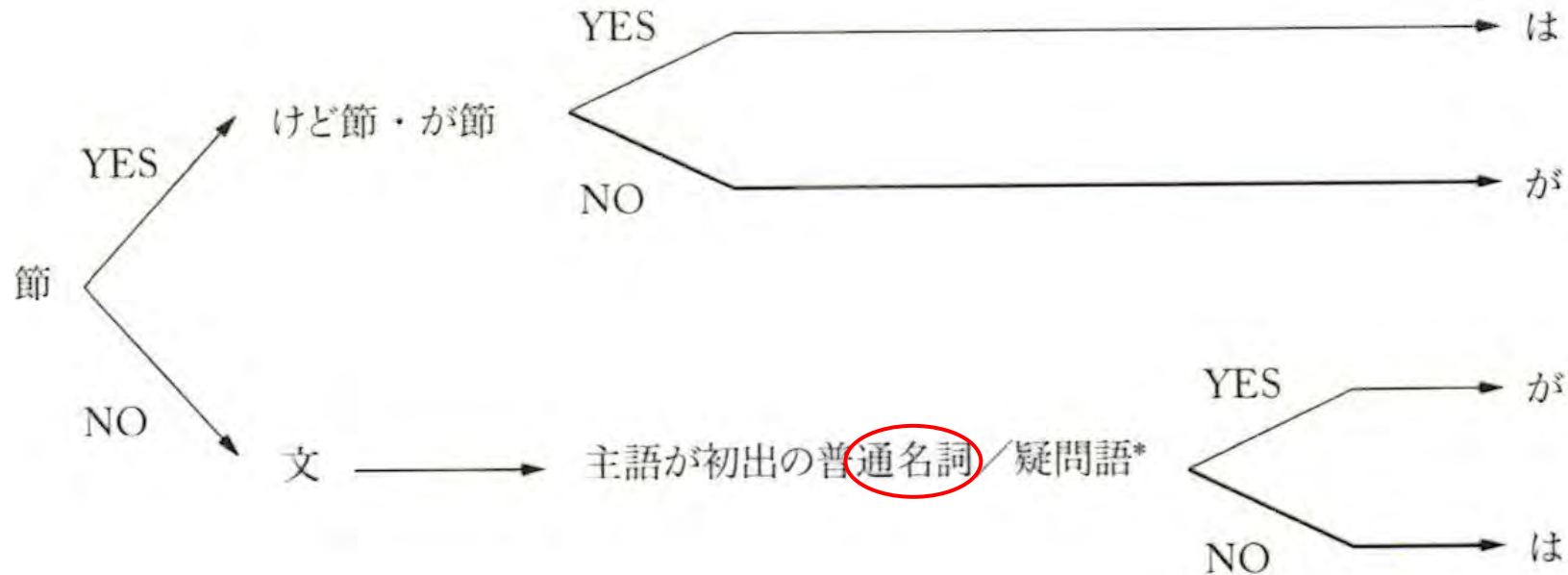
- ▶ 庵・高梨・中西・山田（2000）：野田（1996）を参考に作成したもののだが、総記の「が」の扱いに問題があった





## 4. 先行研究

- ▶ 庵（2011）：本発表のフローチャートに似ているが、「普通名詞」という学習者には難しい概念を用いたところに問題がある



ただし、\*の規則でNOの場合で、述語が名詞+だ/形容詞のときに「が」を使うと「排他」の意味になる。

## 4. 先行研究

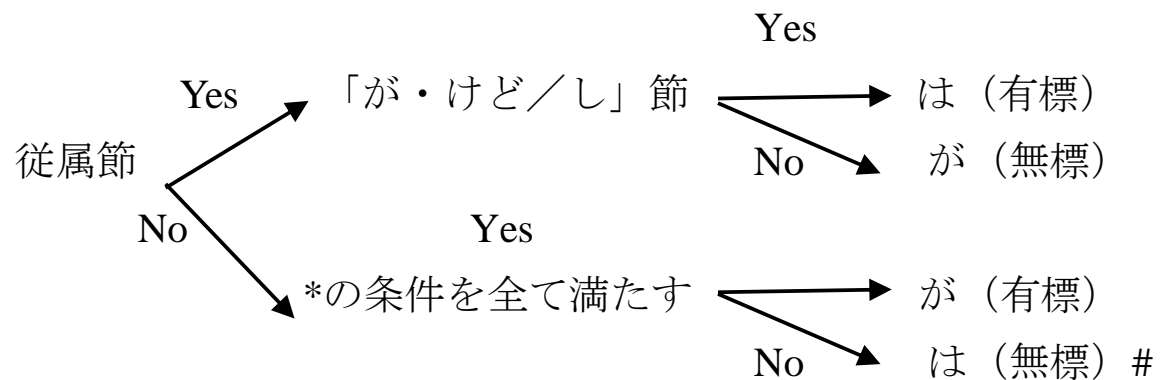
- ▶ 庵 (2016a) (前稿) : (単文・主節のみ) 庵 (2011) と同じく、「は」と「が」を無標、有標で捉える。庵 (2011) との違いは、「AもBも使える」場合を、産出に限定して考えれば「Bを使って問題にならない」と考えること。本発表との違いは、中立叙述の「が」と総記の「が」を同じレベルに置いていること

	総記「が」	中立叙述「が」	「は」
文脈X	○	×	×
文脈Y	×	○	×
文脈Z	×	×	○
	○	×	○
	×	○	○

有標  
有標

← 「は」 を使っても間違いにならない

## 5. 新しいフローチャート



\*a) 主語が3人称

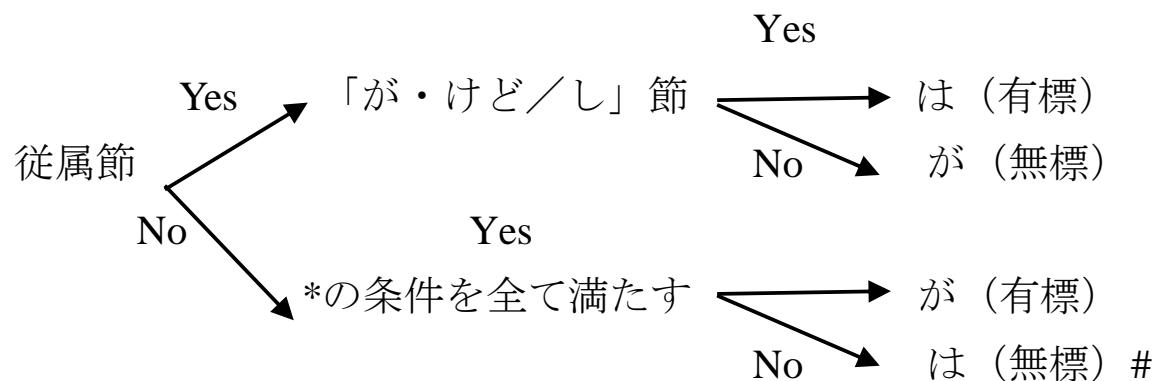
b) 述語が動詞でactualなテンスを持つ (=恒時ではない)

c) 主語がそのテキストに初出

#の場合に「が」を使うと、必然的に総記と解釈される

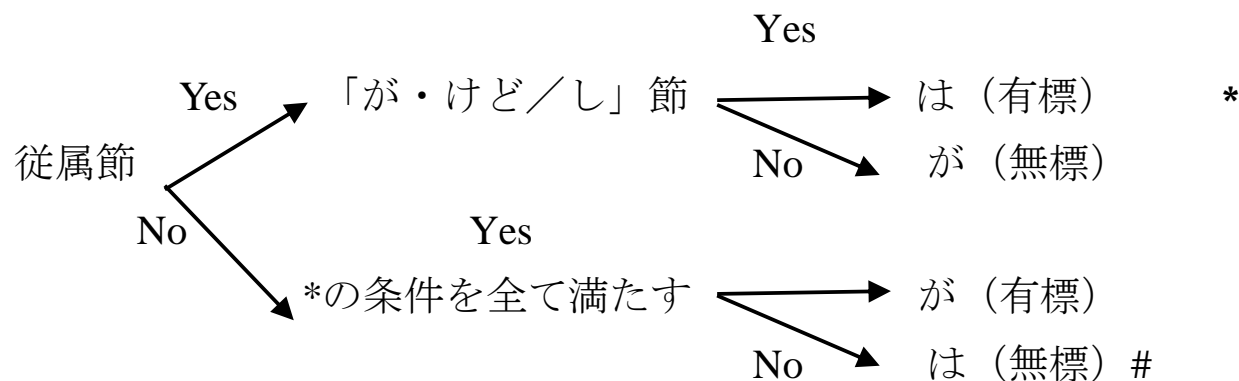
→ **「総記」を基本的な規則から排除する** (cf. 庵・高梨・中西・山田2000)

## 5. 新しいフローチャート



- (8) a. **従属節では、通常「が」**を使う。ただし、「が・けど」節および「し」節では「は」を使う
- b. **単文・主節では、通常「は」**を使う。ただし、図1の\*の条件を全て満たす場合は「が」を使う
- c. bで「は」を使うべきところ (#) で「が」を使うと総記の解釈になる

## 5. 新しいフローチャート

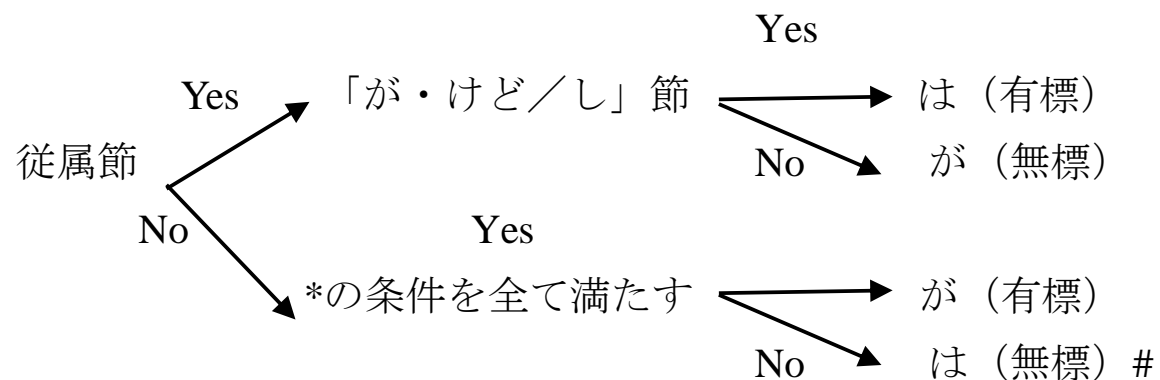


- (8) a. **従属節では、通常「が」**を使う。ただし、「が・けど」節および「し」節では「は」を使う
- b. **単文・主節では、通常「は」**を使う。ただし、図1の\*の条件を全て満たす場合は「が」を使う
- c. bで「は」を使うべきところ (#) で「が」を使うと総記の解釈になる

→いつ、総記の「が」を使うべきか？

→ (9) 文脈上叙述の対象が「そのものだけ」が意味になるときは、主語に「が」をつける

## 5. ここまでの結論



- \*a) 主語が3人称
- b) 述語が動詞でactualなテンスを持つ
- c) 主語がそのテキストに初出

- (8) a. **従属節では、通常「が」**を使う。ただし、「が・けど」節および「し」節では「は」を使う
- b. **単文・主節では、通常「は」**を使う。ただし、図1の\*の条件を全て満たす場合は「が」を使う
- c. bで「は」を使うべきところ (#) で「が」を使うと総記の解釈になる

- (9) 文脈上叙述の対象が「そのものだけ」が意味になるときは、主語に「が」をつける
- 「は」と「が」の使い分けに必要なのは、最低限の統語的知識と文脈に関する感覚のみ
- **「は」と「が」は、どの母語話者にとっても、難しくない**

# 「のだ」との関連 (庵2013、庵・三枝2013)

- ▶ 書きことば（特に論説文）における「のだ」の用法はほとんどが「言い換え」
- ▶ 田中さんは16歳から18歳までカナダで過ごした。 **カナダの高校で勉強したのだ。**
- ▶ S1 S2-のだ
- ▶ S1。S2のだ。（S1は文連続でもよい、S2は「のだ」に前接する部分）において
- ▶ 意味的にS1=S2
- ▶ →読解ストラテジーとしては、「のだ、わけだ」「つまり、すなわち、要するに」があれば、S2の意味がわかればよいと考える（**文末の接続詞** 石黒2008）
- ▶ 「のだ」が多い文章は、その前の部分が読まなくてもいいものになるという点で、稚拙である
- ▶ →「のだ」は「どうしても自分の言いたいことを伝えたいとき」にだけ使う
- ▶ →「のだ」の**過剰使用を防ぐ**
- ▶ →これと同様の注意を「総記の「が」」についても与える

## 6. 本発表のまとめ

- ▶ **1. 「は」と「が」はこんなに簡単だった！－「呪縛」からの解放－**
- ▶ 「は」と「が」に関する教師と学習者の共通見解
- ▶ (1) a. 「は」と「が」は難しい
- ▶ b. 「は」と「が」は韓国語話者以外は使いこなせない
- ▶ 新しいフローチャートから使い分けに必要なのは...
- ▶ a. 最低限の統語的知識（主語、従属節か否か、テンスの種類など）
- ▶ b. 文脈に関する感覚
- ▶ → (10) **「は」と「が」の使い分けはどの言語の話者にとっても難しくない**
- ▶ → 「呪縛」からの解放



## 6. 本発表のまとめ

- ▶ **1. 「は」と「が」はこんなに簡単だった！－「呪縛」からの解放－**
- ▶ **(10) 「は」と「が」の使い分けはどの言語の話者にとっても難しくない**
- ▶ → 「呪縛」からの解放
- ▶ → (10) は日本語学の研究成果と一致する (cf. 野田1996、Iori 2017)
- ▶ 尾上 (1973) 「は」：結文の枠 「が」：文核
- ▶ Kuroda(1972) 「は」：categorical judgement 「が」：thetic judgement
- ▶ 益岡 (1987) 「は」：属性叙述文 「が」：事象叙述文
- ▶ 仁田 (1991) 「は」：判断文 「が」：現象叙述文
- ▶ 三上 (1953)、西山 (2003)：指定文、倒置指定文、措定文

# 6. 本発表のまとめ

- ▶ **2. 「産出のための文法」の勘所**
- ▶ 「産出のための文法」において重要なこと
  - ▶ ・「100%を目指さない」記述
  - ▶ ・類義表現を「無標－有標」の対立に落とし込む

## 参考文献（主なもの）

- ▶ 庵功雄（2011a）「日本語記述文法と日本語教育文法」森・庵編（2011）、pp.1-12
- ▶ 庵功雄（2011b）「「100%を目指さない文法」の重要性」森・庵編（2011）、pp.79-94
- ▶ 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門（第2版）』スリーエーネットワーク
- ▶ 庵功雄（2013）「「のだ」の教え方に関する一試案」『言語文化』50、pp.3-15、一橋大学（追加）
- ▶ 庵功雄（2015a）「「産出のための文法」に関する一考察—「100%を目指さない文法」再考—」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』pp. 19-32、くろしお出版
- ▶ 庵功雄（2015b）「中国語話者の母語の知識は日本語学習にどの程度役立つか—「的」を例に—」『汉日语言对比研究论丛』7、pp.165-173
- ▶ 庵功雄（2016a）「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』pp.289-306、くろしお出版
- ▶ 庵功雄（2016b）「「母語の知識を活かした日本語教育」に関する一考察—格枠組み（Case frame）における日英対照を例に—」『一橋日本語教育研究』4、pp.41-50、ココ出版
- ▶ 庵功雄（2017a）『新しい日本語文法の教え方1』くろしお出版
- ▶ 庵功雄（2018）「「は」と「が」の新しい捉え方についての一考察」『一橋日本語教育研究』6、ココ出版
- ▶ 庵功雄（2018予定）『新しい日本語文法の教え方2』くろしお出版
- ▶ 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- ▶ 庵功雄・三枝令子（2013）『上級日本語文法演習 まとまりを作る表現』スリーエーネットワーク（追加）
- ▶ 庵功雄・杉村泰・建石始・中俣尚己・劉志偉編（2017）『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社
- ▶ 石黒圭（2008）『文章は接続詞が決める』光文社新書（追加）

## 参考文献

- ▶ 尾上圭介（1973）「文核と結文の枠」『言語研究』63、pp.1-26
- ▶ 白川博之（2002a）「記述的研究と日本語教育－「語学的研究」の必要性と可能性－」『日本語文法』2-2、pp.62-80
- ▶ 張麟声（2011）『新編中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社
- ▶ 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- ▶ 野田尚史（1985）『セルフマスターシリーズ1 はとが』くろしお出版
- ▶ 野田尚史（1996）『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- ▶ 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
- ▶ 三上章（1953）『現代語法序説』くろしお出版より復刊（1972）
- ▶ 三上章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版
- ▶ 三上章（1963）『日本語の論理』くろしお出版
- ▶ 森篤嗣・庵功雄編（2011）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- ▶ Iori, Isao (2017b) "A brief survey of functional differences between the "topic" marker *wa* and the "subject" marker *ga* in modern Japanese", *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 58-1, pp. 15-32, 一橋大学
- ▶ Kuroda, S.-Y. (1972) "The categorical and the thetic judgement", *Foundations of Language*. 9-2, pp.153-185.

ご清聴ありがとうございました